

報告書名：エイジング因子と口腔乾燥症・舌痛症の関連に関する調査研究

研究者名：安細敏弘<sup>1)</sup>、吉田明弘<sup>1)</sup>、高田 豊<sup>2)</sup>、竹原直道<sup>1)</sup>

所 属：<sup>1)</sup>九州歯科大学健康増進学講座・保健医療フロンティア科学分野、

<sup>2)</sup>九州歯科大学健康増進学講座・総合内科学分野

### 【目的】

近年の高齢化社会や生活習慣病の増加に伴い、口腔疾患の疾病構造が変化しており、口腔乾燥や舌痛などを訴える高齢者が増加している。こうした患者では日常生活の満足度が十分得られず、ストレスの多い生活になる。また、口腔乾燥症や舌痛症は高齢者に多い疾患であることから、加齢に伴うホルモンの変動と関連している可能性も考えられる。そこで、本研究では地域在住の高齢者を対象にストレスおよび加齢に関連したホルモンであるコルチゾル、クロモグラニン A および DHEA (Dehydroepiandrosterone) の唾液中レベルの検出を行い、口腔乾燥症および舌痛症との関連を疫学的に検討することを目的とする。

### 【研究方法】

対象者は、福岡県北九州市（門司区、小倉北区、小倉南区、八幡東区、八幡西区、若松区、戸畑区）に在住する高齢者 172 名（男性 86 人、女性 86 名、平均年齢：68.4 歳）であった。診査項目は、口腔および全身の自覚症状に関する問診、現病歴、既往歴、服薬状況、口腔内診査（歯、歯周組織、舌）、唾液流出量検査などであった。舌粘膜については、舌の色、裂紋の有無、舌乳頭の萎縮、舌面乾燥の有無について評価した。統計ソフトは SPSS 14.0J for Windows（SPSS 社）を用い、有意水準は 5%とした。

### 【結果と考察】

口腔の自覚症状に関する問診の結果から、対象者 172 名をグループ A：自覚症状なし；グループ B：口腔乾燥感のみ；グループ C：複数の訴えあり、の 3 つのグループに分けた。その結果、年齢、糖尿病治療の有無、喫煙歴、唾液流出量（刺激時）および現在歯数においてグループ間に有意差は認められなかった。一方、口腔乾燥感などの自覚症状を有する者では高血圧症による治療を受けている者が有意に多かった（ $P=0.003$ ）。各グループにおける唾液中バイオマーカーを比較したところ、DHEA 濃度においてグループ B が最も高く、グループ間に有意差が認められた（ANOVA、 $P<0.05$ ）。一方、コルチゾル、クロモグラニン A および総タンパク濃度についてはグループ間で有意差は認められなかった。そこで、口腔乾燥感を含む複数の自覚症状の有無を判別する唾液中 DHEA のカットオフ値を ROC 曲線から算出したところ、至適カットオフ値は 45～55pg/ml あたりと考えられた。次に多重ロジスティック回帰分析を用いて、唾液中 DHEA のカットオフ値と口腔乾燥感を含む複数の自覚症状との関連を検討した。唾液中 DHEA 濃度を 45pg/ml に設定した場合、口腔乾燥感を含む複数の訴えを有するオッズ比は 2.1 倍であった（ $P=0.03$ ）。これらの結果は、エイジング因子とされる唾液中 DHEA と口腔乾燥症や舌痛症の重症度との関連性を示しており、口腔乾燥症や舌痛症の病態がホルモンの変動と連動している可能性を示唆している。

### 【結論】

地域在住の高齢者を対象として、ストレスおよび加齢に関わる唾液中バイオマーカー 3 種と口腔の自覚症状との関連性を調べたところ、唾液中 DHEA レベルと口腔乾燥感および舌痛との間に有意な関連がみられた。本研究は口腔乾燥症および関連疾患である舌痛症の病態がエイジングに関わるホルモンの動態と密接に関わっている可能性を示唆したパイロット研究と位置づけることができる。今後、追跡調査により唾液中バイオマーカーと病態との詳細な検討を行う予定である。